



[講演]

立教大学日本語教育 センターの理念と 可能性

前日本語教育センター長、
異文化コミュニケーション学部長
池田 伸子

○池田 長い時間お付き合いいただきまして、どうもありがとうございます。やっと最後になってまいりましたので、お付き合いください。時間が押しているということですので、私も15分を目指してお話をしたいと思います。私、最後にお話をさせていただきますが、私自身が立教大学の日本語教育センター員でございますので、私からはきょう貴重なお話をさせていただいた先生方のお話を踏まえた上で、今後、立教大学の日本語教育センターがどういうふうに関展していく可能性があるのかということをお話させたいと思っています。きょうのお話の流れとしまして、まず、新しい組織ではありますが、立教の日本語教育センターというのがどういう理念をもつてつくられた組織なのかということと、それから、これはあえて立教の日本語教育センターとは言いませんが、多くの日本語教育センター、あるいは日本語教育組織が一度は感じたことがあるのではないかと、ちょっと嫌だなと思っていることを申し上げて、そこからどう抜け出し、可能性を見いだしていくかということをお伝えできればと思っています。【スライド⑥-2】

まず、日本語教育センター、立教の理念ですが、これはもう学内の方がいらっしゃる、また言っていると思われるぐらい、私が何度も何度も伝え続けていることです。つまり、教育、評価、研究、開発。このサイクルのというのが、絶対に日本語教育、これは日本語教育だけではないと思いますが、その組織には必要なんだ、切っても切り離せないんだということです。特に研究というところが絶対に切り離せないんだということを、私はずっと声高に叫び続けています。ですので、この4つをきちんとサイクル、意味を持って回していけるような組織で

あること。それから、つどつどのところに連携というふうにありますけれども、日本語教育センターの中だけでこれを回していると、本当に自分たちだけで完結してしまう組織になってしまうということがあるので、例えば、研究であっても内外の研究者、あるいは教育機関と連携していく。それから、開発にあたっては内外と連携していく。それから、教育にあたっては、これは大学内、主に私たちが目指しているのは、大学内の他部局との連携を狙って効果的な教育をやりたいということ。それから、今お話があった評価ですけれども、これも内部でやっている評価は意味がないので、外からきちんと客観的な目を見ていただく。それを自分たちできちんと分析をして、それをまた研究、開発、教育につなげていくというところを重要に考えています。【スライド⑥-3】

次に、日本語教育センターの悲劇。これは、繰り返し言いますが、立教ではありません。というか、立教だけではありませんというスタンスでお聞きください。まず、ここにいらっしゃる方々はそんなことは決して絶対はないと思うんですが、まだこういう誤解があります。つまり、日本語母語話者であれば日本語教師になれるのではないか。それから、日本語ができる人だったら、日本語を教えられるんじゃないの。加えて、日本語というのは学問を学ぶためのただの道具ではないか。ここで重要なのは「ただの」という3文字でございます。皆さん本当に聞くまでもないと思うのですが、日本語が母語であるからこそ教えられないということは往々にしてあることですし、やはりこれからの時代、日本語教育、日本語教師として、きちんと責任を果たしていくためには、日本語教育の知識を持った人、その教育を受けた人というのが必要ではないかというふうに考えています。加えて、日本語教授法であるとか、教材であるとか、教材を載せるメディア、それから評価。これは本当に日々進化していくもの、変わっていくものです。ですから、日本語教育に携わっている者としては、その日々の進化にきちんとついていくだけではなくて、やはり日本という母語の環境の中で日本語教育を展開している者としては、やはりちょっとでもいいからリードしていこうというような気持ちを持って教育を行っていくべきではないかと思っています。それから、ただの道具ではない。道具ではあるけれども、「ただの」道具ではないということで、こういうふうにと考えると、これは本当に誤解であって、実は日本語教師というのは日本語教育についての専門的な知識を持っているのだけれども、そういうふうになかなか理解が得られていない。日本語教育についての専門家なのだから、海

外の日本語教育機関などで、人的にそういうリソースがないというようなところ、あるいは、海外のネイティブの日本語教師の人たちに対して教師教育であるとか、教材開発というようなところで力を発揮できるのではないかと考えています。

それから、もう1つよく言われることですが、日本語教育は大学の中で外枠的な位置づけでいいのではないかと。つまり、学ぶべきは学問、つまり、専門領域であって、日本語教育をつかさどる教育機関というのは外枠に置いておいていいのではないかと。ここでもやはり言語というのは道具であるということが出てきます。ここであえて「そうです、日本語は道具です」と申し上げたいと思うのですが、学ぶべき学問、専門領域をよりよく学ぶためには、やはり日本語というのは欠かせないということです。その学問を学ぶための日本語を1日も早く身につけてほしいというふうに多くの専門の先生方は考えると思うんですが、そういうふうに1日も早く学問領域に近づいていけるような日本語教育を提供するというのは、日本語教育の専門家の役割だと思っていますし、よりよく学問を学ぶためには、1日も早く。それは、やはりそれぞれの専門領域に一番合った形の日本語教育というのを私たちがデザインして提供することも可能ですよという連携の仕方も今後あるのではないかと考えています。

それから、例えば日本の歴史、日本文学、そういうものが専門で日本語を学ぶという外国人学生はもちろんたくさんいますが、現在、多くの日本語を学び始める学生のとりにかかりはサブカルチャーであったり、ポップカルチャーであったり、Jポップであったり、ビジュアル系バンドであったりというようなところです。もしそこをきっかけに日本語に興味を持った学生があまりにも日本語のハードルが高い、あるいは、面白くないということで、日本語の勉強をやめしまうと、その人たちはそこから先、例えば、日本学者、日本研究者になっていく可能性がなくなってしまうことがあります。なので、ポップカルチャー、サブカルチャーというもので日本語というものに触れた学生に、そのハードルの高さを感じさせず、日本語を学び続けさせられるようなプログラムであるとか、教材というものを開発していくということも一方で考えられます。ということで、ここからは、例えば、効果的な教授法開発、多様な教材開発、それから、専門と密接に結びついたプログラム開発というのが私たちにある可能性だということが言えると思います。

それと、重要なのは、学問なので、日本語は随意でいだろうとか、キャンパスの国際化は英語化だということもよく耳にする話ですが、これも大きな間違いで

す。キャンパスが国際化するということは、例えば、やさしい日本語というのは、ここにいらしていただいている方は皆さんご存じだと思いますが、何もすべての文章を英語化するとか、英語で授業を行うことではありません。例えば、重要なのは学問なので、では、コンテンツだったら英語でやってみればいだろうと考えるのではなく、確かに一方でそういうことがあってもいい、必要だとは思いますが、必要なのは考え方を変えてやさしい日本語でコンテンツを伝えるような科目を展開してみるということではないでしょうか。あるいは、専門と密接に結びついて日本語教育と専門教育が1対1で連携をしながらプログラムを展開していく。そういうような形での展開をすることによって、日本人学生と外国人学生が1つの教室で学ぶという環境が生まれることで、本当の意味でキャンパスが国際化するのではないかと考えています。

そのように、日本人学生と外国人学生があまり高くない日本語能力でも一緒にコンテンツを学べるような科目のデザインというのも、日本語教育のもう一つの役割ではないかと考えています。【スライド⑥-4】

こういうふうに日本語教育センターに対してよく外から聞こえてくるお話に対して、私なりの意見を述べさせていただきましたが、最後に、立教の日本語教育センターがそれを踏まえた上で、どういうふうに今後展開していく可能性があるかということをお伝えしたいと思います。まず、日本で日本語を効率的に学ぶ機会を提供する。多くの海外から日本に、立教大学に学生を送ってくださる教育機関の先生方は、恐らく、自分のところではできないことをやってくれと思っいらっしゃるのではないかと思います。なので、日本で日本語を効率的に学ぶ機会を提供するというをまず考えたい。ここには、日本語だけでなく、そこに付随するさまざまなことも含めていければと思っています。それからもう一つは、海外の日本語教育機関のニーズに応える。つまり、自分のところではこういうふうな教材が作りたいたいけれども、ちょっと日本語のネイティブの数が足りないであるとか、プロフェッショナルの数が足りないというところについては、そういうところと連携をしながら、私たちが持っているノウハウであるとか、知識であるとか、パワーであるとかというようなものを伝えていくということも、1つのこれからの可能性なのではないかと考えています。それから、新しいキャンパスの国際化。これは日本語教育センターでなければできない提案だと思っています。やはり多くの大学関係者は、国際化、グローバル化というときに、真っ先に英語

というのが頭に浮かぶというのが今の現状ではないかと思います。そうではなくて、違う方向から国際化をしていくということもあり得るのだ。つまり、英語というのがすぐに頭に浮かぶということがいけないというのではなくて、両方から攻めていくことで、より深い形で国際化をしていくということがあるのではないかとこの提案を日本語教育センターとしてはしていくということが、可能性としては挙げられるのではないかと考えています。それぞれ、例えばですが、立教大学はどうするのかと最初、丸山先生に突きつけられましたので、例えばですが、日本で日本語を効率的に学ぶ機会というところに関連のあるものとして、各学部、各研究科、例えば、ダブルディグリー、ジョイントディグリープログラムをやりたいと考えたときに、それを日本語という部分から支援するようなことは、これから十分に可能だと思っています。日本語を組み込んだ上で、ダブルディグリー、ジョイントディグリーをデザインしてみませんか、しかもその日本語プログラムはあなたの学部のためのものです、あなたの研究科のためのものですよというような提案の仕方は、今後、かなり可能性があるのではないかと考えて、営業をかけたいと思っています。

それから、短期プログラム支援ですけれども、これもやはり留学生数というのはどこまでもついてきますので、短期プログラムをやりたいといったときでも、日本語を核にする、あるいは、やはり日本語をちょっとどこかに入れてほしいというようなご要望にお応えできるのではないかと考えて、これも御用聞きに回ろうと思っています。

次に、青いところですが、これは、例えばノンネイティブの日本語の先生が非常に多いというところについては、例えば、2週間、3週間、立教大学で教師トレーニングをしませんか、実質的なトレーニングをしませんかというような短期プログラムを提案するというのも可能であると思います。それぞれの場所、それぞれの国、それぞれの地域に合った教授法、合った教材というのがあって非常にいいと感じているところがあるのであれば、そういうものを一緒につくっていくということをどんどん展開していけたらいいなと思っています。

それから、新しいキャンパスの国際化提案ですけれども、これにつきましては、先ほども言いました、英語だけではない、やさしい日本語でというような発想。これをキャンパスの中に広げていくということ。それから、日本人と外国人と一緒に学ぶ。それも少ない日本語の知識で、日本語で学ぶという科目を提供するこ

とで、多文化共生であるとか、本当の意味でのグローバル人材の育成のお役に立てるのではないかと考えています。ここで私はJ科目というものを考えていますので、これも近々、大学に談判に行きたいと思っています。

こういうふうに具体的にこれから日本語教育センターの中で話を詰めていって、できることからどんどん実現させていきたいと思っています。【スライド⑥-5】

ここは最後の小澤先生のお話にもつながりますが、立教大学の日本語教育センターは非常に新しい組織ですので、これからすべてきちんとやっていくということが可能です。ですので、もう今までもやってきていることはありますが、これからは本当により意識的に、目標、何が必要なのか、結果は、それからどうしたんだということを、繰り返し意識的にやって行っていきたいと思っています。それも自己中なものではなくて、センターの役割、それからセンターに対するニーズ、それからセンターの目標の中でのその活動の位置づけであるとか、意味というものに結びつけたプログラム評価というのを繰り返しやっていきたいと思っています。そうすることで、立教大学の日本語教育センターは成長し続ける日本語教育センターであり続けることができるのではないかと考えています。

以上、本当に非常に短い時間ではございますが、皆さんのお話を受けて、立教大学の日本語教育センターとして今後、きちんと取り組んでいく中でこの可能性をどんどん実現に結びつけていきたいと思っています。ありがとうございました。(拍手) 【スライド⑥-6, 7】



【スライド⑥-1】

立教大学日本語教育センターの理念と可能性

異文化コミュニケーション学部・日本語教育センター
池田 伸子

立教大学日本語教育センター
CJEC



【スライド⑥-2】



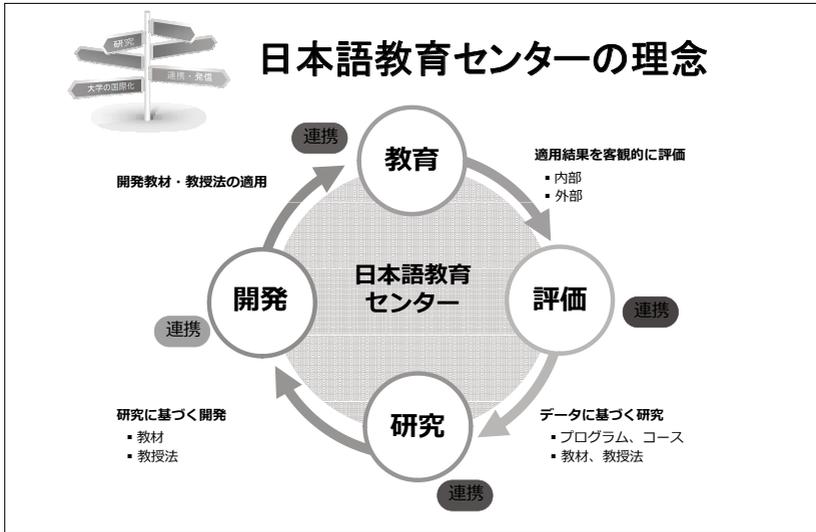
今日のお話しの流れ

① 日本語教育センターの理念

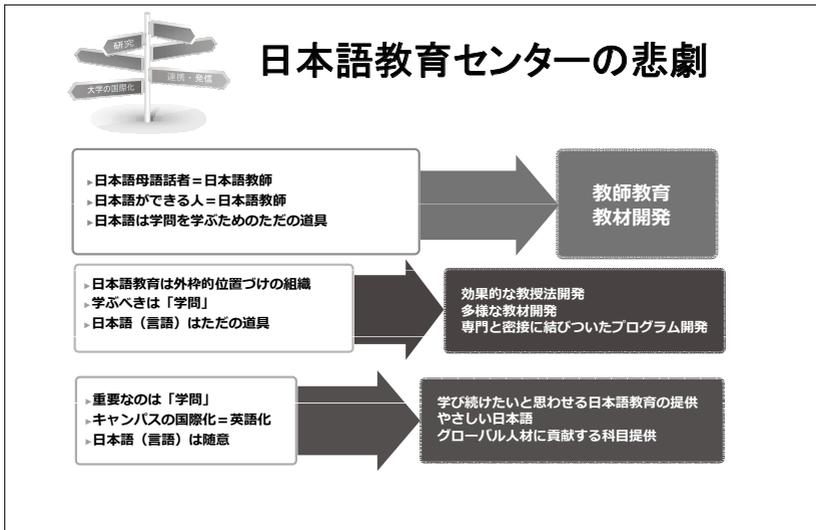
② 日本語教育センターの悲劇

③ 日本語教育センターの可能性

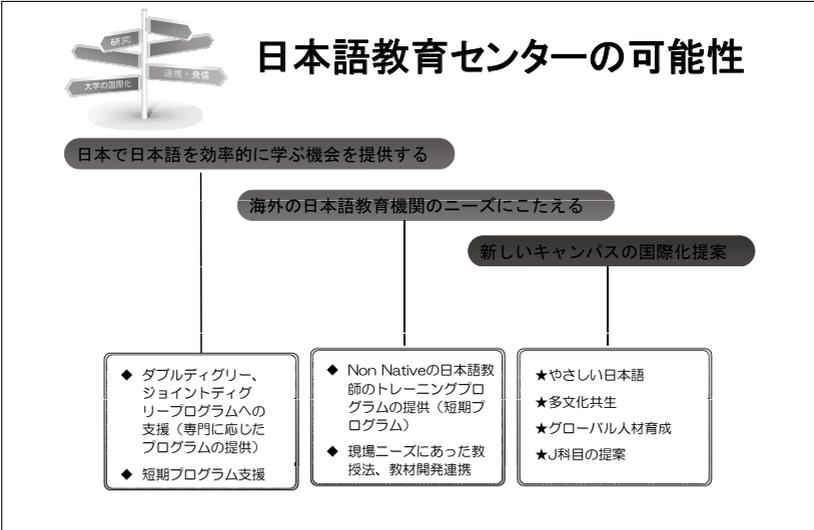
【スライド⑥-3】



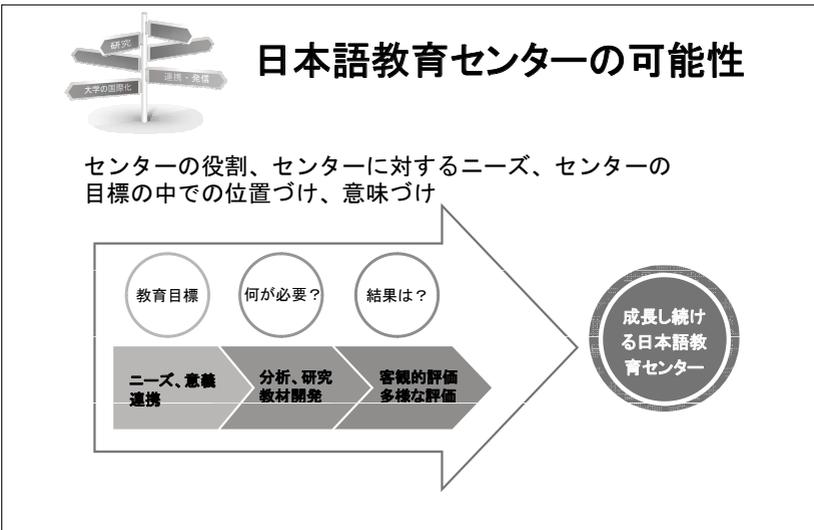
【スライド⑥-4】



【スライド⑥-5】



【スライド⑥-6】



【スライド⑥-7】

Thank You!

これからも頑張っていきます。

立教大学日本語教育センター

